研究テーマ　　回復期病棟のナースコールに対する実態と意識

施　設　名　　竹川病院

発　表　者　　○吉田しず香　木村方美　酒井純江　児玉綾子　阿部亜由美　岡田有希子

概　　要

【研究背景】

先行研究では、一般病院でのナースコールの実態調査を実施しているが回復期病棟における実態調査はない。その為、回復期病棟におけるナースコールの実態と患者、病棟スタッフ（看護師・介護士）のナースコールに対する意識を明らかにし、看護ケアの質の向上を図りたいと考えた。

【研究目的】

・回復期病棟におけるナースコールの実態を知る。

・患者、病棟スタッフのナースコールに対する意識を把握し病棟スタッフの対応の変化と患者との意識の違いを明らかにする。

【研究方法】

１．調査期間：2012 年８月～10 月

２．対象：回復期病棟入院患者で同意を得られた患者１回目 56 名・２回目 54 名、回復期病棟勤務スタッフ１回目 54 名・２回目 52 名。

３．データ収集方法：無記名式アンケート調査

４．実施

① ナースコールの使用状況調査（３日間）

② 患者･病棟スタッフのナースコール意識調査（初回）

③ 病棟スタッフで①と②の結果を共有した。
結果を各人に配布し、カンファレンスを実施。

④ 3 ヵ月後、変化を見る為に患者・病棟スタッフに初回と同じ内容のアンケート調査を実施。

５．調査項目：ナースコール内容（排泄・吸引・症状・身の回りの援助・食事・その他・離床センサー）
ナースコール意識調査内容（ナースコールを押した時の病棟スタッフの返事・患者の気兼ね・対応満足）

６．分析：患者・病棟スタッフそれぞれに対してのナースコールの意識について初回・3 ヵ月後で χ^2 検定を行った。また、患者・病棟スタッフ間で意識の違いについて χ^2 検定を行った。

７．倫理的配慮：参加は任意で匿名であることを患者及び家族、病棟スタッフに説明し同意を得た。

【結果・考察】

ナースコール実態調査では１日平均 551 回あり、排泄が 54%、離床センサーが 27%であった。排泄介助が多いのは離床を進める回復期病棟の特徴といえる。

アンケートの結果から患者の 5 割に気兼ねがある・時々あると答えていた。その為、自ら行動することで離床センサーのナースコールが多いと考えられる。

対応満足については、患者の１回目と２回目、P 値＞0.05　病棟スタッフの１回目と２回目、P 値＞0.05 共に有意差はなかった。しかし、ナースコール使用時の対応満足について患者は大変満足と思う割合が 20%から 28%に増加し、病棟スタッフは大変満足が 2%から 0%に減少した。病棟スタッフが提供している看護ケアの対応を見直したからと考えられる。

患者と病棟スタッフ間の満足度で 1 回目 P 値＝0.01、２回目 P 値＜0.01 と有意差があり意識の違いが明らかになった。このことより、１回目の調査時に患者は病棟スタッフが思うより、病棟スタッフの対応に満足していたが、２回目では患者の満足度は上昇し、逆に病棟スタッフは自分たちの対応でよいのかと模索し、満足度が下がっていると思われ、患者と看護師の認識の差が大きくなったと考える。

【結語】

1. 回復期病棟のナースコールの内容は、「排泄」と「離床センサー」が８割を占めていた。
2. ナースコールに対する意識については、カンファレンスを行い、ナースコールの実態について病棟スタッフに情報提供を行った結果、患者の満足度が上昇した人数が増え、病棟スタッフは満足度の高い人の数が減ったが、有意差がなかった。また、患者・病棟スタッフ間で意識の違いが明らかになった。

このことから、病棟スタッフがナースコールの実態を把握することにより、対応を振り返り対応が向上する可能性が示唆された。